

牡丹等花葉共雕之、又有五花盆、四花中加山梔、花葉共雕之、其製堆朱也或圓盆、或四花樣、五花樣共全黑漆、爲覆輪者亦有之、或有堆朱方盆、多雕花葉、適有雜青漆且雕之者、又有稱若狹盆者、此等小堀遠州嘗尙之、於今以珍焉。

按世傳云、若狹盆者、北齊渤海之制、或云、明朝之初、漂流於若州海濱也、其證未詳、又曰、先來者五枚、後來者七枚、未聞其所據、且底裏文字及紋不同、或識德字、或識業字、或畫梅樣形、是茶入盆最極品者也、〔千家茶事不白齋聞書〕盆之事

一黑塗四方盆、利休千ノ字ノ寫有リ、若狹盆、ふちせいじ内朱、是は若狹江唐人著之時持來ル、松ノ木盆、紹鷗五葉松也、菱盆 丸盆 彫物盆、是は彫殘シ逆繪或は彫物ふち計りにて、内鏡ノ所黒ぬり、或は朱にて殘し候ガ能候、内ニ彫物有はかたく不用、長盆は横繪の盆を能トス、如此繪有がよし、併奈良の松屋に有之紹鷗の也、星の立ッ繪ナリ、先は横繪長盆稀也、大丸盆 妙喜庵、松ノ木盆、覺々齋

〔茶道筌蹄〕茶入盆之部

若狹盆 此盆元七枚箱に入て、若狹の濱邊に流れ寄る、唐物の盆なり、此盆に似よりたるを何れも若狹盆といふ、内朱外青漆、葉入角なり、いにしへ内朱の盆と云は此盆也、

唐物 唐物といふは、皆朱の盆の事なり、

存星 名高きは、松屋肩衝の許由の長盆なり、別に書有

堆朱 丸角とも内に鏡なきは、茶入盆に不用、

青貝 青貝は形一定ならず

羽田 羽田五郎作、矢筈盆、松屋所持なり、

松木 四方盆、葉入春慶、紹鷗より利休へ傳へ、利休より今小路道三に傳ふ、道三箱書付に翠竹と